

# 日本文化協会報

(第九号)

発行所  
日本ビルマ文化協会  
大阪市南区長堀橋筋2-28  
電 06-213-5858  
発行兼編集人  
保科賢一

特別頒布  
ビルマ地図 (250円)  
ビルマ語会話集 (300円)  
〒55円  
申込先  
大阪市南区長堀橋筋2-28  
日本ビルマ文化協会  
振替口座大阪310039  
取引銀行  
三和銀行日本一支部

## 文化交流資金の設置等

### 政府の新東南アジア政策の基本構想 付 国際交流に関する中教審の答申

政府は去る一月、田中首相が東南アジア諸国訪問の際、バンコク、ジャカルタで学生の反日デモの洗礼を受け、反日感情の予想以上の熾烈さを認識されましたので、これを契機に、各関係省庁に対して、東南アジア政策の根本的立て直しを指示していましたが、五月上旬その基本的構想を決定致しました。

その基本的構想の重点は、経済協力の質的改善と、文化交流の促進であり、文化交流の具体策として、「アジア文化交流資金」の設置(「アジア文化会館」としての「在アジア日本文化会館」の建設を策定しました)。

「アジア文化交流資金」設置の考え方は、①アジア諸国相互間の文化交流②アジア研究の助成③教育機関援助④一般教育施設整備の援助等のために此の資金を有効適切に利用しようとするものです。

又、文化交流では此の外、「留学生会館の建設」「里親制度の拡充」等の留学生問題が重視されていますが、他方日本側としても従来の公費留学生の行き先の欧米一辺倒を改めたり、五千人に達する教員の海外派遣先も重点を東南アジア諸国に置き換える事を検討しています。

要するに此等の政策は大平外相の所謂「良き隣人としての関係づくり」がその基調となつていますが、最近の東南アジア諸国にみられる「反日感情」の底流には、政治的・経済的基盤の動揺に起因した構造的な問題が介在して居るもので、期待通り各国との相互理解の接点を持つ事が出来るか一抹の懸念があります。

他方文相の諮問機関である中央教育審議会は五月廿七日総会を開き「教育・学術・文化に於ける国際交流に就て」の答申を纏め、文

相に提出しましたが、その概要は左記の通りです。

(一)従来の国際交流は「欧米偏重」「経済優先」に傾斜していたので、その結果、相手国の文化、国民性に対する理解、認識を欠き「国際協力、協調の出来ない日本人」や東南アジア諸国で批判の強い「独善的・閉鎖的日本人」をつくつてしまった。

(二)従つて爾後の交流の基盤を「教育・学術・文化」に置き、政治・経済面より自立させ、交流内容の質的転換を計るべきである。

(三)このため目標を「国際社会で信頼し尊敬を受ける日本人の養成」に設定しそれを実現するため(1)学校に於ける外国語教育方法の改善(2)外人教師、留学生受け入れ体制の整備と日本語教育の充実を計るべきである。

(四)更に、留学生等に対する日本語教育を効果的に行うため「日本語教育センター」を設置しなければならぬ。又留学生や外人教師の宿舎、待遇は質・量とも改善すべきであり、その具体策は(1)留学生の宿泊設備の整備は、国費留学生のみならず、私費留学生も対象

## ビルマ国歌

Adagio ゆるやかに

カバ-マチェ-バマー-ビエ-トボボワアモエスイモチ-ミヤノバー

ビーダウンスゴアテハロド-カゴマレー-ダド-ビエ-ミド-ハインネ-ミー

ド- ビエ- ド- ミエ- アチョ-ゴ- コニアズド

ドウエナセサウンド ゾーレー

## ビルマ国の国歌

とする。③彼等の宿泊設備を、全国主要都市に計画的に整備する。④日本人学生との共同生活を可能にする。⑤滞在費・医療保険に就て特別の配慮をする。

(田人物・芸術作品の交流面では、芸術家・文化人の交流を拡大すると同時に、国内での国際芸術祭や海外での日本芸術祭の開催を積極的に行うべきである。

(内)わが国の国際交流の窓口は現在、外務省・文部省・総理府・文化庁・民間団体等多岐にわたっているが、之を改め連絡体制を整備すべきである。

以上の答申内容は総花式の「よいことづくめであります、此の答申諸項目の具体的実施計画を早急に樹立し、実施可能な容易な項目から順次実行に移される事を心から期待するものです。(保科記)

ビルマ国の国歌は、一九四八年の独立直前に、詩人・作曲家の協同に依り作成され、独立宣言と同時にビルマ国歌として制定されたものです。その内容は、第二次大戦直前に、反英独立運動の主役を演じたかの有名な「ドバマー党」の党歌の影響を多分に受け、勇壮活潑な中にも一種の哀愁を込めたメロディーです。

原譜は、二拍子の変イ長調で、一寸歌いにくいので、普通は四拍子のハ調でゆっくり歌われます。歌詞の大意は次の通りです。

世界史上 わがビルマの国を決して忘れてはならない。われらが愛し尊敬する祖先から伝わる血統が純粋であるが故にわれらは生命をかけて国を守る



このわれわれの国 国土  
われわれの義務であるから  
幸福を追求して団結しよう  
この優れた国よ

ビルマ国の新国名(日本名)

訂正お知らせ

第八号会報にてお知らせしまし  
た、ビルマ国の新国名(日本名)  
「ビルマ社会主義共和国連邦」は、  
日本名呼称の統一見解として左記  
の通り訂正させていただきます。  
(保科記)

ビルマ連邦社会主義共和国

会員諸氏にお願ひ

昭和四十九年度総会開催日(九  
月末日予定)までに、会員名簿を  
都道府県別に整理して、正式に印  
刷を致し度く、目下作業中ござ  
いますので、住所・勤務先・電話

「ビルマ語懺悔」

服部 正 一

戦前のことであるが、ドイツ語  
の辞典で有名な戸張信一郎先生が  
「ドイツ語」雑誌に「ドイツ語ざ  
んげ」と題されて興味ある先生の  
体験談を書かれたことがあった。  
ここで私も先生の題を拝借して  
「ビルマ語ざんげ」と題して思い  
は三〇年前の在緬時代に帰る。  
ビルマという国についての私の  
最初の印象は奇妙という感じが強  
い。先づ、街を歩く雑多な種族、

番号、職業等に変更の要ある方  
は、来る七月末日までに左記へ書  
面にて御連絡下さる様お願いしま  
す。  
京都市右京区嵯峨新宮町六八  
(〒六一六)  
塔本成幸宛(総務部)

寄付者御芳名

- 一、〇〇〇円 久木 田麿氏
  - 二、〇〇〇円 坂田清之助氏
  - 三、〇〇〇円 瀬口 祐吉氏
  - 四、〇〇〇円 長谷川 稔氏
  - 五、〇〇〇円 岡部長太郎氏
  - 六、〇〇〇円 饒三氏 (ハンコク)
  - 七、〇〇〇円 本間 三郎氏
  - 八、〇〇〇円 某氏
- 右、御寄付賜った方々に、誌上  
を通じ、厚く御礼申し上げます。  
(総務部)

彼らの話す種々な言語(ビルマ  
語・英語・ヒンディ語・タミール  
語・グジャラティ語・シャン語・  
中国語等)、通りの看板に書かれ  
た〇のたくんさん並んだビルマ文  
字、黄色い僧衣に身を包んだボン  
デーの姿、井戸端にてイエチヨ  
(水浴)する人々、巡査のサラン  
ペー(挨拶・敬礼)の仕方まで風  
変りに感じられた。またジャンゲ  
ル地帯に入れば、見慣れない動

物、鳥、虫等が棲息する。シャン  
州にて最もすばらしく思えたのは  
シャン・ソーボワ(土候)の宮廷  
生活の豪華絢爛たる絵巻物のよう  
な場面、等々どれ一つをとっても  
日本とは全く異なっていた。  
私はビルマに上陸する前には英  
語と少しのインド語(ヒンディ  
語)を知っていたが、ビルマ語はた  
だ一語「有難う」のルチエズデー  
ンがしか知らなかった。当時のラ  
ングーンでは英語とインド語がよ  
く通じたのでビルマ語は知らなく  
てもさほど不自由しない位であっ  
た。ところが北へ進むにつれて、  
インド語の通じる人が少なくな  
る。タウングーの町でのこと、道  
路にいたビルマ人の子供の一人が  
私のそばに来て、じろじろ見る。  
私は英語で話しかけたが通じな  
い。インド語で言うと、右手の五  
本の指をすばめて、ちようど赤ん  
坊に玩具のがらがらを廻して見せ  
るような恰好をした。その時は訳  
が解らないままに過ぎたが、  
それは「あなたの言うことがさつ  
ぱり解らない」即ちナー・マレ・  
プーの手真似であった。その頃か  
らどうしてもビルマ語を知らなけ  
ればその日その日の用も足せない  
ことを感じはじめた。

乾燥した時期に、夜か、夜明けに鳴  
くことが多いとのことであった。  
その後、何回もタウテの鳴き声を  
聞いたが、その鳴き声に答えて、  
ビルマ人がどかげに向って「アピ  
ヨラー、アオラー」(処女か結婚  
しているのかとか)「モラー、  
レーラー」(雨か風か)とか何の意  
味もなしに問い返す習慣がある。  
これも私には大そう奇妙に感じら  
れた。

始めてどかげの鳴き声を聞いた  
のはメティラ北方のジャンゲルの  
中の古寺においてであった。朝早  
くけたたましく「タウテ」と鳴く  
のを聞いた時、不思議な鳥だなあ  
と思いつながら、坊さんに尋ねる  
と、それはタウテというどかげの  
一種であることを知った。空気の

ピョボエでのことであった。一  
人のイエ・タン・ダマー(水運び  
の苦力)からパーリー語のことを  
聞いた。ビルマではパーリー語に  
達した人は大いに尊敬される。僧  
侶は生涯パーリー語で仏典を学ぶ  
のである。ビルマ語の中にはずい  
分多くのパーリー語彙が借用語と  
して含まれていて、ことに仏教関  
係の書物にはパーリー文が多く見  
出される。私も戦前内地にいた  
頃、言語学の本の中でパーリー語  
はサンスクリット語の方言で、現  
在ではちようどヨーロッパ諸語の  
古典作品の中にラテン語が用いら  
れている如く、パーリー語は南方  
にて古典文学や小乗仏教の聖典の  
註釈語として用いられていること  
などを読んでいたが、ビルマでは  
僧侶間にてパーリー語が生ける現  
代語であるかの如く使われている  
ことはその後もマンダレーにて僧  
侶の間で盛んに話されていること  
で知った。例えば、  
パーリー語  
(1)カンマンカロヒ  
(2)バツタンボンザヒ  
(3)ウダカンピワヒ

- (4)タンピ・ロヤンボツサ
  - (5)キニヤードウラトニテイダ
  - ビルマ語(ビルマ語の番号と同一義)
  - (1)アロツ、ロツバ (仕事をしなさい)
  - (2)タメン・サーバ (食事をしなさい)
  - (3)イエ・タウ・バ (水を飲みなさい)
  - (4)トウゴ・ビヤツタナーメロー (彼に尋ねなさい)
  - (5)メインカレマー・アウエー (娘さんから遠ざかって坐りなさい)
- 等の表現も日常話されていた。  
この頃より僧侶に出あう毎に断片  
的にパーリー語を用いることにし  
た。  
パーリー語について思い出され  
ることは、マウン・チュエという  
ビルマ兵補のことである。概し  
て、ビルマの兵隊でパーリー語を  
よく知っている人は少ないである  
が、このマウン・チュエ君は実  
にパーリー語がうまい。彼は、夜寝  
床に入ってから長いパーリー文を  
暗誦するのである。それを私にビ  
ルマ語で説明してくれたものであ  
る。  
彼の前歴を尋ねると正直に話し  
てくれた。彼は以前僧侶をしてい  
た。幼いコイイン(小坊主)の頃  
からパーリー語を仕込まれ、ウパ  
ズイン(年令が二〇才を過ぎてか  
らなる僧侶の階級)になる数日  
前、村の娘と何気なく雑談してい  
るところをボンデーに見つかり、  
破門されたとのことである。小乗



仏教の疑は厳しい。

マンガレーで、ルイスというアイルランド人とビルマ人の混血児が部隊に雇われて、ビルマ人の運転手たちの監督としてはいってき

料理はルイスにまかせて食事を終え、外に出て看板を見ると大きくムハメッド何某の店主の名が書かれてあった。

ところで、カービヤは英国人、または他のヨーロッパ人とビルマ人、または中国人とビルマ人等一般の混血児を指すのである

アラカン王国の日本武士

◇ 歴史書にも載っていない亡命キリシタン ◇

山田長政と同時代の人間

このたびメキシコ大使になった。

鈴木 孝

私の前任地ビルマで、ここには四十六年一月から三年余、駐在した。

この機会に、私がビルマにいた間に知った一つの史実とそれをめぐっての話を披露したい。これは、私にとつて、在ビルマ時代の記念すべきエピソードであるし、一般の方々にも、予想のほかにとて、必ず興味を持ってくださると思うからである。

今から約三百年前、ビルマの一角のアラカン王国に、日本のキリシタン武士の団が亡命し、国王の護衛として重用されていた事実を、日本の歴史家はご存じであらうか。

三百年前といえは日本の寛永年間、ちょうどシャム(今のタイ)のアユチャ王朝で山田長政が活躍していたころだが、山田長政の事跡はよく知られているのに、そのアラカンの日本武士のことは日本では全く知られていないようである。私が調べてみた限り、日本の歴史の書物には載っていない。

日本では知られていないばかりか、実は地元のビルマでも一般には知られていないのである。私がこの話をすると、たいていのビルマ人がびびりくする。ビルマ人は親目的だから大変興味を示して「大使はどうしてそういう事実を知られたのか」と聞くのである。ところがこの事実を私に知らせてくれたのは、ほかならぬビルマの老学究である。

ポルトガル語の古書に  
事のいきさつはこうである。私はビルマという国に深い関心をいだいて赴任してきたものだから、

やがて、日本人が初めてビルマの地に入ってきたのは、いつの時代だったろうか。御朱印船貿易がキッカケとなって山田長政がシャムまで来ていたとすれば、そのころそのすぐ西隣であるビルマにも日本人が、来ていた可能性は十分ある。ひとつ探り出してみようと思

掛けるようになった。すると、ある機会に知り合いになったビルマ文化省の歴史調査官のティン・ハン氏が「そういえば昔のアラカン王国で日本のサムライが国王のポデーガードをしていたと何かの文献で読んだ記憶がある。この文献を捜し出してお目にかけましょう」と言ったのである。これは面白いぞ、と心待ちしているどやがてある日、彼はラングーン大学の図書館から、ペーリをめぐるとポロポロにはがれ落ちそうになる一冊の古書を借り出し

てきて「これですよ」と貸してくれた。見るとこの本は、十七世紀の前半にセバスチアン・マンリーケというポルトガルのカトリック僧が書いた東南アジア旅行記の第一巻「アラカンへの旅」の英訳版(一九二六年オックスフォード大学出版)であった。

これによるとマンリーケ神父は、そのころアラカン王国——この王国はビルマの王朝割拠時代に今のバングラデシュの一部をも領有し、西部ビルマに覇を唱えていた強力な仏教王国である——に属していた今日のチッタゴン港の南

のディアンガと呼ばれたポルトガル人居留地の司祭であったが、ある緊急用務を帯びアラカン王に陳情におもむく途中、この日本の武士の団に出会ったのである。マンリーケはきわめて印象的にこう記している。

「私の乗った船が定めぬ川岸に着くと、歓迎の鉄砲を撃ちどろかせながら着飾った日本人の団が土手の向こうから現れ、私に向かつてうやうやくし平伏した。すると、その中の一人が船に上がってきて私の足元にひざまずいた。この日本人の名はドン・レオン・ドノ、アラカン王の護衛隊長であった。彼は言った『これら日本人はすべてキリスト教徒で、久しくとだえていた宗門の神父の来訪を聞き歓迎してまかり出たものである。神父から福音を授かりたい。また神父の力添えて日本人町に教会堂を建立する許可を得たい』と。その態度は礼儀正しく敬虔でしかも熱意にあふれ、まことに頼もしき信徒の姿であった。私は川岸に降り、これら日本人一人一人に福音を授けた」。

「やがてアラカン王からの出迎えの大臣が到着し私はその船に乗り移ることにしたが、この好ましき日本人レオン・ドノと、このまま別れるのに忍び難く私は大臣の許可を得て彼を同行することにした。レオン・ドノは神父や大臣と同船同座できることは破格の名誉であったと言ひ、厚く礼を述べるのであった。私は感した。この民族(日本人)は東洋のすべての民



族の中で性質として最も名誉を重んずる民族である。小さな名誉でもこれを守るためには命をも犠牲にするのであろうことを。レオン・ドノとの出会いはその後の仕事に非常に役立った。彼は私にとって神の加護に次ぐ最も貴重な助けとなったのである。

いつの日か墓捜したい

マンリーケは陳情の任務を首尾よく果たした後、王国の首都にしばらく滞在するのだが、その間、レオン・ドノは神父の布教上の仕事を勞をいとわず手助けする。他方神父もレオン・ドノの願いをいれて日本人町教会堂建立の許可を国王から取りつけてやる。こうして両者の間には深い心の交流が生まれたようである。マンリーケは「私はその後の旅行中もドノ・レオン・ドノ隊長の友情をしばしば想起した」と記しているのである。

さてこのレオン・ドノと名乗った日本武士は一体どの何者であったか、また彼をリーダーとした日本武士団がアラカン王国という日本から海路はるかな異郷になぜどうして来ていたのだろうか。マンリーケの旅行記にはこの点を明らかにする記述は見当たらない。徳川幕府のキリシタン迫害を逃れて日本を脱出亡命した連中であることは容易に想像がつく。キリシタンではなかった山田長政は日本と文通していたが、この武士たちは禁制のキリシタン衆として世をはばからねばならなかったため日本との関係は一切断つてその氏素性を堅く秘していたと思われる。

私はいつの日か機会があれば、アラカン王国の首都であったミヨウハウンの古跡を訪れて、その後の年月の経過の中に望郷の念やみ難くも、アラカンの土と化さねばならなかったであろうこれら日本武士たちの墓を捜してみたいと思っている。そして「あなた方の存在をやっと見つけましたよ」と言つてやりたいと思う。  
(前駐ビルマ大使、協会名誉顧問日経より転載)

ビルマの抗日文学 (一)

マウン・ティン作『ガ・バ』

大野 徹

一九四二年から四五年までの三年間におよぶ日本の軍政を、ビルマ人はどう見ているのか。一九四三年八月には独立を許されたとは言うものの、その実態がどのようなものであったか。ビルマ人の眼に、日本および日本軍がどう映つたか。こうした事柄をビルマの文学作品の中に探ってみたいと思つた。こうしたのは、今後の日本とビルマとの親善関係を考へる上でビルマ人の対日観に無頓着であつてはならないと思つたからである。

ガ・バは、二十五エーカーばかりの水田を小作すること一家五人を細々と養っている。近頃めつきり娘らしくなってきた長女ミニーが婿をもらえば、小作面積もえ暮しも楽になるだろう。婿と

力を合せて一生懸命働けば、自分の農地をもつこともできるかも知れない。こうしたささやかな夢をもつガ・バ一家に大きな変化が訪れた。イギリスと日本が戦争を始めた。ビルマに日本軍が進軍してきたのである。日本兵は、ガ・バ達の住む村へもやつてきた。タイ・ビルマ鉄道建設用の労働者集めがねらいである。狩り集められた村人の中には、ガ・バの姿もまじつていた。夫の積貯を懇願するミニーは、一緒に夕方宿舎へ来いという。母に伴われて宿舎を訪れたミニーは、将校に手込めにされてしまふ。ミニーの婚約者チェッデーは、その日から姿を消した。タンリに帰ってきたガ・バは、レジュスダンス運動のタキ・ミョーニユンらをかまくまうが日本軍に発見される。山の麓へ連行されたガ・バ達は、そこで穴を掘られる。は、途中の村に駐屯していたゲリラ部隊に事件を報告する。ゲリラの隊長は、娘の婚約者チェッデーであった。チェッデーの率いるゲ

「日本の農村青年とビルマ人の語らい」

田 辺 寿 夫

館林の「ビルマ展」は地元の人々の熱意に支えられて成功裡に幕を閉じた。単にビルマの品物を展

示するにとどまらず、両国の親善と友好を深めようという情熱のほとばしりは展覧会をとりまく様々に

の行事に見られた。ここに御紹介する群馬県邑楽郡板倉町の農村青年たちと、ビルマ人の意見交換会でも、そんな情熱が、ともしばおさなりに終る親善の集いを、有意義なものにまで高めたのだ。

五月二十五日夕刻、会場となった実行委員の一人、荻野勘一氏宅へ参集したのは板倉町の社会教育主事宮田茂氏をはじめ、「青年の船」などで海外渡航経験のある二十五才から三十才前後の青年凡そ十名。いずれも土に生きるという古いイメージからは脱却した活動力旺盛な青年達。

一方、ビルマ側は、当初予定されていた東京在住の留学生たちがいづれも都合で来られず、東京のNHKでビル語アナウンサーとしてつとめるウー・チョウウーと、その夫人ドローメイメイ・ニユンの二人。

同じくNHKビルマ向け番組のプロデューサーの筆者(田辺)が通訳をうけもち、宮田さんの司会で話し合いがはじまり、まず、青年たちの好奇心からビルマの一般的な事情についての質問がとびか

た。答えるチョウウー氏はBBS(ビルマ国営放送局)で十年も働くベテランジャーナリスト、著書も七冊に及ぶという経歴を生かして、ツボをはずさぬ適確な答を出し、夫人も、ラングレンの高等学校につとめるビルマ語の教諭とあつて、四、四、二制という、わか



りにくいビルマの教育制度などを明快に説明する。

戦禍に痛めつけられたのちの独立ビルマの苦難、日本人には考えもつかぬ内政の災い、教育・衛生に力を注ぐ政府の努力、経済の停滞、厳しい非同盟中立をとらざるを得ない周囲の状況……。簡単なインフォメーションではあつても、それが直接ビルマ人の口から説明されるだけに、出席者に深い感銘を与え、新たな興味をよびおこした。

そして農村問題。それまでの話合いで深められた相互理解は討論に熱を帯びさせた。

農村地帯からの人口流出、特に若い人々の離農を日本の農村青年が指摘する。東京から館林までの車中、緑も見えない東京の住宅密集を逃れて、なつかしげに田園風景に見入っていたチヨウウー氏に、日本の工業発展とは何かを考えさせる指摘であつた。

しかし、農村の崩壊現象はビルマにもあると、かつて農事放送番組を担当していたチヨウウー氏は答えた。

たゆまぬ労働の末に、一年に一度しか現金を手に入れぬ農民の立場。政府買上げの農作物価格の低さ。昼は政府の威令が行きわたるも夜になると反乱軍が無理難題をふきかけ、安心して働けない農村の状況。農民の物心両面にわたる疲労は甚しく、都会へ職を求め出る趨勢を喰ひ止め難い。このため、農業生産はさらに落ち、休耕地は荒地と化し、米の輸出王国は

昔日の夢となりつつある。

ビルマ人の口から語られる悲しみこめた説明は青年たちの胸を打った。日本と共通した問題もあり、まったく異なる問題もある。しかし、自ら農村社会に生きる青年にとっては充分に理解でき、ビルマ人の苦しさを自らの苦しみにして、受けとめたのだ。

やがてはじまった会食の席でも、熱心な討論はやむことはなかった。心をひらいて話しあえば、おたがいに理解できるのだ。そうした理解こそが、日本とビルマの親善活動の第一歩なのだ。

青年とビルマ人の熱のこもった語り合いを、静かに、あるときは驚き、あるときはほほえみながら見守っていた館林ビルマ展の提唱者鈴木崇之丞参謀と、故ボモジョー(鈴木敬司大佐)夫人の胸にも、そんな感慨がよぎったのではないだろうか。

(筆者はNHK国際局アジア部ビルマ語番組担当プロデューサー)

ビルマの印象

市村真一

去年の四月と七月、たてつづけに二回ビルマをおとすれて、政府や大学の人々と懇談し、またラングーンやマンダレーの街をかい間みることができた。ビルマの学術的研究に着手する手がかりの得られたことが何よりの成果であつたが、親しく人情風物に接することができて、百聞は一見にしかずと

いうわけで、その国がらや現状を判断する上で、一段と力を得たように思う。

ビルマといえば、戦争を経験した年配の日本人にとっては、ことに悲痛なる思い出がまつわることであろう。現に同行した久馬教授は二人の知人から、せめてビルマの石でも持ってかえってくださいと頼まれた。戦死者は遺骨さえ戻らなかつたのであろう。また若い人のなかには「ビルマの豊稔」のなかでの美しい叙情とビルマの風物をおぼえておられる人もあろう。

しかし現に見るビルマは、貧しい農業国で、ラングーンの街を歩いた印象は、今から十数年前に約一月月滞在したバングコクの様子と似ていた。貧しい東南アジアのなかでもここにさびれていた。無理はない。第二次大戦の後のビルマの政情不安はまさに不幸であつた。北からは国民党政府軍の残党が流入して来たり、タイ国境の方面にはカレン族の反乱があつた。これらをやつと取りしずめたと思うころビルマの主産物で主要輸出品である米の値段が下落し始めた。

この打撃は深刻で、今に及んである。中共よりにゆれ、ネールの中立策に追随し、独立を指向しつつ、いくたびかの内紛をへて、ついに今のネ・ウイン大統領が、先のウ・ヌウ首相をクーデターで追放して、革命委員会による政權を確立したのが今から十三年前の一九六一年三月二日のことであつた。その政權は、工業は国有化、

農業は協同組合化を追求する社会主義政策で、しかも中国やソ連の共産主義とは手を結ばぬ、いわば国家社会主義路線である。したがって経済的には一種の鎖国政策で、自力更生をめざしているのだが、その無理がたつたて成長は落ち、国民生活は苦しく、内政上問題がおこりかねないという。しかも「ビルマ人のためのビルマ」をつくるため商業貿易をにぎつていた中国人、インド人を追放したから、その方面の効率が落ちて、ヤミの流行をきたしているらしい。

経済は苦しいのだが、人情は純朴で、接してみても実に感じのよい人が多い。しかも日本人には、米ソ中のいずれよりも好感をもっている人が多いということであつた。おそらくこれには、ビルマの独立が、日本が訓練して同道した「三十人の英雄」の手で着手されたという事情がからんでいるかも知れない。東南アジアを回つてみて、日本の悪口をきかぬ日はないのであるが、ビルマは例外であつた。ラングーンとマンダレーの寺院に参拝して、祈りをささげているビルマ人にまじつてみると、子供のころ祖母につれられていった「弘法さん」や「天神さん」を思い出した。仏教が庶民の心と生活のなかに生きているこのような国で、マルクス・レーニン主義がどこまで力を得られるものであろうか。インテリヤリしい人が、仏教とマルクス主義の融和を考えよと投書している記事があつたが、できることではない。

しかしこのビルマにも世界の波はひたひたと押しよせている、私どもの泊まったストランド・ホテルには人民服をきたランド・ホテルには人民服をきたランドの技術者的一団が他の人とは別卓で食事をしていたし、ビルマの農業の協同組合化政策を指導しているのは、ソ連仕込みの大臣であるし、アメリカの批判攻撃は、時折りきかされたが、某ビルマ記者は、ビルマの庶民の九割は、中ソよりもアメリカが好きだと語つた。町の映画にもっとも人気のあるものは、とたずねたら、全部の人がハリウッド映画と答えた。日本からは、賠償支払いの縁で、ナショナルと久保田鉄工と東洋工業の技術指導した工場があるが、文化学術や政策指導の点では、まだ何もしていないのであつた。

(筆者は京大・東南アジア研究センター所長。京都新聞)

大野特別会員及び新研修生の歓迎会

五月十九日(日)、大阪心斎橋界隈の中国飯店「大成閣」にて、最近ビルマ国より帰国された大外大の大野助教(特別会員)及び四月上旬、新たに来日した七名の研修生の歓迎会を催した。

協会側より酒井、小谷両副会長外五十余名の会員、大外大ビルマ語科学生、ゲストとして大外大の服部・原田両教授、それにウ・チヨウ・タン外二名の研修生が参集した。



新来日研修生名簿 昭和四九年五月現在

- ウ・ポウ・タア 一九四〇年 アキヤブ生
- 紡織学 東大阪市松原南十一四六
- 大阪外大留学生 花園寮内
- ウ・モン・エイ 〇七二九一六一六二三七
- 一九四六年 アキヤブ生
- 高分子化学
- ウ・アウン・タン 一九四六年 シエボウ生
- 合成繊維
- ウ・チョウ・ティン 一九四六年 メークテイラ生
- 合成繊維
- ウ・キン・モン・ウイン 一九四七年 ウンドウイン生
- 繊維工学
- ドウ・キン・マア・マア 一九四八年 ラングーン生
- 物理学 吹田市津雲台三二〇一七三 関西留学生会館内
- 〇六一八七一―二八八二
- ドウ・テイ・テイ 一九四四年 ボンベイ(印)生
- 染色化学



四月五日、羽田空港到着ノ新  
研修生一行。中央は栗原理事

日本にはビルマ国に於けるパコダの如く、牛車の轡の如く無数の大学があるが、凡そ「ビルマ語科」を専門に設けているのは、大外大のみであり、そのスタッフ全員の御出席を賜ったことは当協会の存在価値をいやが上にも高めたものと思う。(某会員の談)

定刻四時、研修生を各テーブルに分散して全員着席、小谷副会長の力強い開会の辞は原田教授の流麗な通訳で、研修生諸君にも充分理解していただけたと思う。引き続き大野助教授の帰国講演(別掲)同助教授撮影に依るビルマの風景の映写、その鮮明なる風物写真も同助教授の懇切な説明でしばし吾人をビルマ国に遊ばせしめる感あり。

小休止後、開宴。大勢の年輩人に囲まれ、堅くならない新研修生達も宴酣になる頃にはすっかり堅さもほぐれ、和気藹々、あちこちに談笑のどよめきが始った。

新研修生諸君の御健闘を祈りつつ、八時頃解散する。(保科記)

大野特別会員の講演要旨

昨年の十一月にビルマへ参り、約一ヶ月許りラングーンに滞在していたが、その時間間隔になつて来たのは、約十二年間続いた軍政を民政に移管する下準備として、新憲法の草案を起草し、その草案を十二月十五日より二週間に亘つて施行される国民投票に諮る予定になつて来た事である。

その為、国民は非常に緊張してゐたし、特に政府の高官連以下末端の行政組織に至るまで、国民に依る国民審査という事でテンヤワニヤの状態であつた。

その結果は一月三日に発表されたのであるが、ビルマでは昨年の四月一日に本格的な国勢調査を行つてゐるが、その総人口は二八、八八〇千人、此の内国民投票権を有する満十八才以上のビルマ国籍を有つ人が約一四、〇〇〇千人である事が判明した。所が国民投票の結果、約一三、〇〇〇千人の人が憲法草案を支持したので、結局有権者総数の九三パーセントに当る人々に依つて草案は採択された事になり、その日から新憲法は発効する事になつた。

人民議会の選挙を施行したが、新憲法では従来の二院制を否定し、一院制を謳つてゐる。

新憲法の内容に就て若干触れるが、一九四八年の独立当時は社会主義社会を標榜する事を憲法に明確に打ち出しておらず、従つて、ウ・ヌ政権時代は社会主義といつてもルーズで、そのために政治的・経済的に種々の弊害を生じた。由つて前者の轍を踏まないために、新憲法は社会主義社会の建設を明確に規定してゐる。

次に新憲法は、国家の主権は農民と労働者を基盤とする人民に在る事を規定してゐる。

第三の特色は従来の議會制民主主義乃至は政党政治が一九四二年より一九六二年に至る間、ビルマに与えた弊害が大きかつたので、此の際一切の議會制民主主義や政党政治は認めない。只社会主義国家建設のための単一政党制を採用し、云わば一党独裁で国家を指導する事を謳つてゐる。

次に一九六二年、ネ・ウインを中心とする革命政許が登場するや、旧来の憲法の廃止、全国の解散をやり、革命評議会が全権を掌握したのであるが、此のメンバーすべては高級将校であり民間人は一人もいなかった。

併し今後は軍政でなく民意を国政に反映させてゆく民政であり、云わば主権在民である事を述べてゐる。

もう一つの特徴として考えられる事は、異民族との協調問題の解決である。御承知の如くビルマに

はビルマ族以外に、カレン・カチン・モン・カヤ・シャン等の異民族が住んでゐるが、彼等との協調提携を如何に円滑にすすめてゆくかが大きな政治課題であつたし、一九六二年のビルマ軍のクーデターも「ユニオンオブバーマ」の弱体を阻止するための手段であつたし、異民族の諸提案を受け入れて、なほ連邦国家の基盤を固めてゆくには、如何にすればよいかという事も新憲法作成の課題になつてゐたと思ふ。

何れにしても、今般二百九条に及ぶ新憲法が十二月実施された国民投票に依り採択承認されたわけである。

今年に入って、一月廿六日より二月十日までの間に人民議会の選挙が実施され全国より四百五十人の代議員が選出された。

続いて三月二日には人民議会の初会議があり、席上ネ・ウイン將軍より軍政より民政への移管が宣言され、革命評議会の解散と共に新たに発足した人民議会在が国権の最高機関であり、国民に代つて主権を行使する事が明確にされたのである。

又前建設大臣のウ・セイン・ウインを主班とする内閣も発足し、やがて二ヶ月有余になる。ここで考えられる事は、人民議会は成程国権の最高機関であること云つても最低年二回しか開催されず、その間は国家評議会がその機能を代行する事になるが、此れが解散した革命評議会の延長であるという事である。

人民議会の選挙を施行したが、新憲法では従来の二院制を否定し、一院制を謳つてゐる。

新憲法の内容に就て若干触れるが、一九四八年の独立当時は社会主義社会を標榜する事を憲法に明確に打ち出しておらず、従つて、ウ・ヌ政権時代は社会主義といつてもルーズで、そのために政治的・経済的に種々の弊害を生じた。由つて前者の轍を踏まないために、新憲法は社会主義社会の建設を明確に規定してゐる。

次に新憲法は、国家の主権は農民と労働者を基盤とする人民に在る事を規定してゐる。

第三の特色は従来の議會制民主主義乃至は政党政治が一九四二年より一九六二年に至る間、ビルマに与えた弊害が大きかつたので、此の際一切の議會制民主主義や政党政治は認めない。只社会主義国家建設のための単一政党制を採用し、云わば一党独裁で国家を指導する事を謳つてゐる。

次に一九六二年、ネ・ウインを中心とする革命政許が登場するや、旧来の憲法の廃止、全国の解散をやり、革命評議会が全権を掌握したのであるが、此のメンバーすべては高級将校であり民間人は一人もいなかった。

併し今後は軍政でなく民意を国政に反映させてゆく民政であり、云わば主権在民である事を述べてゐる。

もう一つの特徴として考えられる事は、異民族との協調問題の解決である。御承知の如くビルマに

はビルマ族以外に、カレン・カチン・モン・カヤ・シャン等の異民族が住んでゐるが、彼等との協調提携を如何に円滑にすすめてゆくかが大きな政治課題であつたし、一九六二年のビルマ軍のクーデターも「ユニオンオブバーマ」の弱体を阻止するための手段であつたし、異民族の諸提案を受け入れて、なほ連邦国家の基盤を固めてゆくには、如何にすればよいかという事も新憲法作成の課題になつてゐたと思ふ。

何れにしても、今般二百九条に及ぶ新憲法が十二月実施された国民投票に依り採択承認されたわけである。

今年に入って、一月廿六日より二月十日までの間に人民議会の選挙が実施され全国より四百五十人の代議員が選出された。

続いて三月二日には人民議会の初会議があり、席上ネ・ウイン將軍より軍政より民政への移管が宣言され、革命評議会の解散と共に新たに発足した人民議会在が国権の最高機関であり、国民に代つて主権を行使する事が明確にされたのである。

又前建設大臣のウ・セイン・ウインを主班とする内閣も発足し、やがて二ヶ月有余になる。ここで考えられる事は、人民議会は成程国権の最高機関であること云つても最低年二回しか開催されず、その間は国家評議会がその機能を代行する事になるが、此れが解散した革命評議会の延長であるという事である。



国家評議会は人民議会の議員の中から選出した二十八人で構成されているがその大半は革命評議会のメンバーであった人達であるから、社会主義家の建設を標榜するとは云うものの実態はネ・ウイン氏を中心とする軍政の継承を扨拭し切れないと思う。

とに角、三月末に帰国するまでの五ヶ月間は丁度ビルマの政治的変動の最中にあり、従って私達本来の仕事は余り出来なかった。

(文責保科)

鈴木孝駐ビルマ大使

駐メキシコ大使に転出

駐ビルマ大使鈴木孝氏は、五月廿一日の閣議で、駐メキシコ大使に任命されました。

同氏は、四十六年一月、駐ビルマ大使に着任来三ヶ年有餘、日緬両国の友好親善に献身的努力を傾注されましたが、その御功績は高く評価されており、

仄聞する所に依れば、同氏が本省の賠償部(現在は陸部)御在勤中、対日賠償に関するビルマ側の交渉相手、ウ・ラ・オンの真面目さ、純粹さにすっかり惚れ込まれ、それを契機に、ビルマファンになられたとか。従ってビルマに對してはビルマ大使のポストも自ら買つて出られた程の力の人れからだつたとの事です。

当協会発足に際しては、早速名譽顧問に御就任、協会の運営に積極的御協力を賜つてきた事は先刻御承知の事と思ひます。

協会員が訪緬、大使を表敬訪問

した折りには公務御多忙中でも、寸暇を割いて面談の機会を与えられ、文化交流に就ての忌憚なき御意見をお聞かせいただいたものです。

又、同氏は日緬交流に関する歴史的事実には特に御造詣が深く、「バガンの末裔」(四号掲載)、「アラン王の日本武士」(本号掲載)等の御隨筆にもその一端を窺う事が出来た。

ビルマ大使御離任の報に接し、誠に痛惜の感に耐えませんが、今後とも何分にも御指導御鞭撻を賜わる様切望致すものです。

尚ほ、御離任に当り、大使より酒井副会長宛に左記の書簡が来ていますので、御披露申し上げます。(保科記)

皆々様益々御多祥の事と存じます。小生、此の度、メキシコへ転勤になりました。ビルマ在勤は小生が予てから希望した所でしたから、その意味で榮転であつたと思ひます。そして小生なりに全力を尽し、ある程度の成果を挙げる事の出来たことを喜んで居ります。ただ三年余りのクローラーの生活のために、一種の神経麻痺が左腕に起り閉口しましたが、ビルマ人名医の治療で殆んど全快しました。

日緬関係は今日がビルマ独立以來最も緊密ではないかと考えます。此の緊密さは今後とも維持し且つ助長すべきものと思つております。此の面で大兄並びに文化協会の側面的御努力に大いに期待しております。

田中総理も十一月初旬にはビルマを訪問されると思ひますし、ビルマの海底油田開発に日本も、米、欧州諸国と共に乗り出す事になりましたから、日緬関係には精神面でも、実務面でも一層充実してくると思ひます。

此の三年余りは、小生の生涯に於て最も意義深いものとして残るものと思つて居ります。

在勤中の大兄の御支援並びに協会の御支援に對し改めて厚く御礼申し上げます。

今の所、七月の初め帰国、約四週間準備の上、七月末頃までにメキシコへ参る予定です。

メキシコへは、田中総理がビルマ訪問前に訪問されるとの事で、総理をビルマではなく、メキシコで御世話する事になりました。一寸皮肉ですが、出来ればビルマでお迎えしたかつたと思ひます。ビルマ政府の要人達も、そう思つて居る様です。

御多忙中、御祝辞や御見舞をいただき、恐縮して居ります。御芳情に深謝申し上げます共に、協会の愈々御発展、日緬親善に御活躍あらん事を祈念して擲筆致します。

在ラングーン  
鈴木 孝

訪 緬 春 秋

東海支部 吉岡 和雄

伊丹空港をとび立つたのは一月六日一〇時、香港へ着いたのは一三時五〇分。

初空やとほき思ひの青深し  
大厦並めて一円青き雲まどふ  
同日一八時三〇分(時差修正)  
宵闇のラングーン、ミンガラドン  
空港に降り立つた。第一夜は海岸  
通りのストランドホテル。さて私  
は文化交流、慰靈に、もう一つ俳  
句を作ることにした。俳句には季  
語、季感を俳句するということ  
は戦中五年、戦後二度の訪緬に私  
を大胆にしてしまった。年中実を  
生えらす椰子も椰子ということば  
を入れた句の季感夏であり、涼  
しい風の中に冷たさを感じる、舞  
落葉を見れば初冬秋冷を感じる。  
一月のタウンジー・バガン・ラン  
グーン・タウンの旅に私は四季  
を感じた。

七日文教省に副大臣ニイニイ博士を表敬訪問した実にくだけた、てらのない人だ。

白首にメガネ涼しき副大臣  
ストランドホテルの近く海岸通り  
には朝市がならんでいた。

正月の朝市に難足括られ  
街中のスレパコダは公園に近く広い道路をへだてて遠くから人の出入するのがよくわかる。

パコダ出づ娘のロンジーに陽炎  
える

鈴鳴りに満員のバス街  
シユエダコンパコダは黄金の延べ板を張りつめたビルマ第一の仏塔・長い階段を省略するエレベーターが直角に導く。

仏塔にひれ伏す母と子の跣足  
大緑蔭ボンジー掌もて飯をとる

夜店ならぶ金色のパコダ暮れゆ  
けは  
八日早朝をタウンジーホテルに迎える。標高千四百米の高地である。松の太木がならび、ヒマラヤ桜と誰か云う桜の大樹があちこちに花を咲かせている。毛布を二枚重ねても夜はとても寒かつた。

落葉踏む遊牛どれも無表情  
落葉降り白き瘤牛面上げず  
パイヤ熱れ大樹の桜空に映く  
赤土の徑徑鳴りけり市場へ行く

インレイ湖舟遊、シヤン高原にある特異な湖である。広い湖の殆んどが底が浅く、高床式住宅が湖中に部落をつくり、湖底の泥を堆積して畑を作る。この足漕舟は世界でも珍しいが、よく見るとなんとなく手で漕ぐより効率的だ。

足で漕ぐ舟シヤン州の山霞  
菜園浮くさみどりの湖真ツ平ら  
湖中の部落到に水中マーケットがある。

横波に傾きつ、売るバナナ舟  
鷗描くシヤンの高空湖潤し  
へーホー空港よりマンダレーへ、  
ゲストハウスに泊る

象牙店出づ月の出のマンダレー  
牛歩むのどかな町の人混みを  
マンダレーは旧王城を含めて甚盤  
割りの整然たる町だ。

映画の露より馬車の音聞ゆ  
霧晴る、マンダレーヒル塔白く  
牛車駆る人ならびゆく春埃り  
マンダレーよりバス約一時間、ア  
バの鉄橋を西ヘイラワジ河を越すと、サガインの町、そして延々と連るサガインヒルは町のはずれから凸凹の道をすこし登つたところ



る。マンダレーヒルの孤立した三角形の山に対し、こは渾てしたくつつく小高い丘陵であつて無数の寺院が点在している。眼下を流れるイラワジ河の景観も素晴らしい。ヒルに至る途中の草地にそのむかし日本の兵站病院があり、全員玉砕したと言う。その付近のくすんだバコダは印象的だ。

パコダ潰え魂を鎮めし草紅葉 群生すサボテン細き花もちて 例によつて院は既足である、台上の回廊の角に祭壇をもうけ、遙かにアラカン山脈よりインパールの空をのぞみ慰霊祭を行う。

石階冷えすれちがふ僧無愛想 木魚響き遙かアラカンの山眠る 仏塔に回廊ありて四方のどか 九日一四時一五分再びマンダレー空港よりニヤンウー空港へとぶ。約二五分ニヤンウーにつく、ビルマで最も雨の少いところ砂深い平原に牛車道が二条の轍の跡を描いてあちこちを走っている。進攻のときも敗走のときも随分苦勞した処だ。自動車走の走れる舗装路は一本よりないこの道路の街路樹はかつての戦いの禪痕を今に残しながら荒涼とした乾燥地帯の唯一の点景となつてゐる。バガンまではバスで約一時間レストハウスについたとき、イラワジ河は漸くオレンジ色の太陽が傾きはじめていた。対岸は大きな中州で、丁度この部落は祭り例の笛、太鼓が夜ッびで聞えてきた。河中に牛車をのり入れて積んであるビヤ樽のようなタンクに水を汲み込んでゐる風景も昔なつかしいものだ。バ

ガン泊り、イラワジの水汲む牛車春夕焼アラカンの大落日よ密柑吸ふバコダめぐる夜市冷えつつ更けゆけり 静かなるビルマの人と朝焚火人住じぬ鳥事なり芝青む 一〇日バガンレストハウス目覚め、バカン遺跡は千年の歴史に耐えて、この中部ビルマの平原の一角になおその姿を残している。最盛期の十二世紀バカン王朝にはバコダが約一万三千あつたという。現存するもので数百に及ぶ。千年の風雨にさらされて骨格の煉瓦積みがわずかに地上に残っているもの、その後の年代に新しく造られたものなど一望の平原にじつとたたずんで、人間社会を見つめてゐるようだ。

春暁や剝落の塔翼張りて シタン河畔にて(十二日) 刈田より瑠璃たつ鳥の影見えす 水牛の漬る沼田は枯色に 火焰樹の花一日の曇り空

静かに余生を送る セヤマ・キムラ 有名な女医さんで御存知の方も多いいと思います。木村起佐先生、当年八十六才、在緬期間約三十年。 四国松山の出身で医者で養女として幼い頃から注射器や薬箱に親しみつつ育てられ、女学校卒業後、養父の激励を受けて当時本邦

唯一の女医研修機関(東京)に入所されたのが、ドラマでお馴染の「おはなさん」と同時代。 同所卒業後、当時極めて稀な女医の資格をとり、医師であつた木村氏(終戦後バンコクにて没)と結婚。大正六年、夫君と共にラングーンへ渡り、国際病院にて各国の医師と共に治療に当られ、その後退職してバセインに三階建ての病院(郵便局として現在)を開業する。昭和十五年、風雲急を告げ、在外邦人の引揚げが開始される時まで、ラングーンに後日開院された分院(御養子夫婦が開業)と共に、ラングーン市内から周辺デルタ地帯にかけて、献身的な医療活動(特にコレラの治療)に尽瘁されたので、当時のビルマ人でセヤマ・キムラの名を知らぬ者はない位有名である。

更に昭和十七年、夫君が軍務で渡緬されるや、起佐女も後を追つて渡緬、爾後終戦で引き揚げるまでバセインの病院で診療に当られる。

「日本に沢山の医者がいるが、私程、数多くのコレラ患者を治療した医者がなく」と自信をもつて言い切られる様に、青春時代から初老の時期まで人生の大半をビルマの医療に捧げて、仁術を施し、博愛を及ぼし、ヒューマニズムに徹した態度は、現地人に親まれ、敬愛され、今尚おビルマの古老の語り草になつてゐます。 現在、左記にて御養子の奥さん、孫さん達は囲まれて静かに余生を送つて居られます。

協会の皆様も、時々訪問されて、ビルマの昔話でも承り、お慰めしてあげてください。 京都市中京区神泉苑通り 御池下ル東側 電〇七五・八四一〇四三三

次の手記は木村起佐女の姪に当る望月とし子さんが、叔母の起佐女がつけられたままに語り続けてきた「ビルマの想ひ出話」を、纏められたものです。何の街いも誇張もなく、淡々としたお話しは誠にすかしく心にやすらきを覚えます。(塔本記)

ビルマの想ひ出(一) 九官鳥ハナ



九官鳥ハナ

京に住む…… 昔ながらの京の街には、歳月に煤けた紅が格子の窓が並び露地には、うす紅の小花が咲きこぼれるベコニアの鉢が、おかふている家が多い。通りを歩むと、ふいに現れた華奢な婦人が、埃しずめの水を手桶から打つと、カラコロと下駄の音を残して、奥に消える姿をよく見受けられる。このような街の一角に、八十五才の起佐女も、しっかりと足取りで、毎朝石畳に水を打つたのである。 ながいビルマの生活を切りあげて、此所に越してきたのは、確か終戦の翌年であった。

にとつても、実に多くのものを失わされた。しかし当時既に六十才近かった身を、無事に保津川ぞいの農村「馬堀」に落ちついただけでも、幸といわねばならなかつた。

あまりにも永く、そしてはげしい女医の生活を、ビルマで過してきた彼女にとって、静かな農村で仕事のない生活に甘んじることが、とうてい出来なかつた。

もう一度街に出て、病院を開いて働いてみよう。 ただひとつ手許に残されていた一カラットのダイヤの指環をゆずつて、資金をつくると、京の街に住いを求めて出てきたのだつた。 神泉苑通りに面したこの家は、間口が狭く、小さな中庭をはさんで、二棟の古い木造家屋が建つてゐる。その表を病院に、奥の二階建を住居にと改造して、今日まで過してきたのである。

近年病院を閉じると、起佐もよやく池の鯉に餌をやり、籠の小鳥に水浴びさせるようなゆとりのある暮しがおとすれた。 晴間にも陽がうつらぬ池に、ぬたりと鯉が浮んでゐる。夜店でたわむれにつけてきた金魚が、いつからか、うす翅をひろげたような尾を、なまめかしく揺らしながら鯉の合間をぬつてゐる。 切紙細工の紙きよを、ホロホロと吹きちらしたようなユキノシタの白花が、水面にゆれてゐる。 ちやぶ台のある居間から、この池が見える。緑からは、いろいろな小鳥の囀りが聞えてくるが、中



でもひとときわ口数の多い九官鳥は、かん高い声で

「オハヨオ オハヨオ」

と甘えかける。好物のバナナをねだっているのだらう……

「オハヨウ。ハナ」

と答えてやるが、どうしてか今朝は、声にも身体にもはりがないような気がする。

永い間、ビルマでそして京都で、全くわれを忘れたように働きつづけた女医生活の疲れが、どつと出てきたのだろうか……始めてのように、起佐も八十五才の年令の重みを感じさせられた。

立ち上がって壁の鏡をのぞきこむと、そこに背中を丸めて、一回りも小さくなった姿がうつっていた。白く光った髪が、いくすじも乱れた髪には、いつのまにか老人性しみがうすい瘰癧のように浮んでいた。

「叔母さん、叔母さんの顔、市川房枝に似ているようよ」

と姪たちから言われる起佐の顔も、今日はいつものきびしさが薄れ、むしろ弱弱しい。

「一日ゆつくり休もうかな——とつぶやくと、孫たちのプレゼントとしてくれた藤の寝椅子を縁近くに引きよせると、ぐったりとした身体を横たえた。

こうしてほんやりと休んでいると、ビルマにおいてきた初代九官鳥ハナに思いが及んで、うつすらと涙が浮んでくる。

女医への道

「ここでちよつと、起佐の生いた

ちと、ビルマに渡つた動機についてふれてみよう。

もの心ついた時、起佐は松山市の有名な眼科医の許に引きとられていた。養母うら女は切長の眼さえざえとした、大島紬の良く映える小粋な婦人であった。かつては湯島小町とよばれたそうである。けれども持病の卵巣腫の痛みにさいなまれ、この治療にうつモルヒネ中毒は、時々はげしいヒステリー症状をおこして皆を困らせた。

「注射……注射早く——と父をせきたてる時の顔は、いつもの笑顔とすつかり変り、警若の面”さながらになつた。

十一才のある日——父のかけつけるのが間に合わず、起佐は仕方なく代りにモルヒネの注射を打つた。これが意外にうまく打てたので、養母には、すつかり気にいら

れ、「出かけるから、注射箱持つてついておいで。」

「はい」

と、都合のつく限り、何処へへでも、古びた木製の注射箱を持つてしたがった。

この頃からだろうか。将来「女医」になつて、病に苦しむ人々を助けよう——と決心したのは。

県立松山高女を卒業、病院の手伝いをしていられるうちに、この希望は燃えあがり、養父におおせお

「お父さん、わがままを言いますが、東京の女医学校に行かせ

てもらえませんか」

「えつ。東京へ出るのか」

「女医になつて、一生病人を助けたいと思います……」

「女の身でなあ……。それにせつかく手伝が出来ないようになつてきたので、手離すのは寂しいなあ。でも仕方ない。お前の気性には、案外女医の仕事に向いてるかもしれないよ」

こうして、彼女は、若い女性の身で、松山から、東京へと出かけたのだつた。

その当時唯一の女医学校、吉岡弥生先生の許には、年齢もかなり開きのある婦人たちが、女医への道をめざして日本の各地から集つていた。

有名なテレビドラマ「おはなはん」と同時代の話である——卒業後、洋行帰りの京都の佐伯理一郎先生の病院で、研修生として学んだ後、国家試験を受けて合格。その頃、女としては数少ない医師としての資格をとると、希望に燃えた人生のスタートに立つた。

最初の赴任地は、雪深い城下町長岡の病院。

若くしかも女の身では、当初村人たちの信用も一向にない様子に思えた。起佐女は、

技術の未熟さは、誠意と努力でおきなう——

と、無我無中で治療に当たっていた。はじめて、逆児の難産に当たると、とまどつた時、

「神さま……どうぞ……どうぞ……私の命を三日ちぢめても、

この産婦とお腹の赤ちゃんを助けてください。——と真剣に祈りながら、お産に当たつた。

「えつ。患者を助けようという熱意よりも、先づ病院経営の採算を考へるという医師もあるなどと聞く度に、時代の流れを感じさせられ、悲しきはぐく思われる。

また私立医大入試の不正の話を聞くと、ほんの一部のうちにせよ、医師の道を選ぶ目的も功利的になつたのかと、寂しい。

「これも八十五才の老いの繰り言かもしれないが——

ビルマへの旅立ち

やがて縁あって木村と結婚した時に、全く思いがけなくも、先輩の女医から、

「ランゲーンの病院に、後任として来てもらえないかしら……」と誘いがあつた。

ひと昔前のビルマは、水道もなく衛生設備は極端に悪かつた。まして水路のいりくんだ暑さのきびしい国である。

常に伝染病が蔓延して、多くの人々が病苦にあえいでいる土地なので、とにもかくにも病院が要るのである。そして医者もまた要るのである。こうした人々の要望で、インド人、ビルマ人、中国人の協力による病院が、ランゲーンに出来たのだつた。

——当世風にいえば、国際病院といえるかもしれないが——

吉岡弥生先生は、教育者であると同時に、大きな夢と理想をもつた、国際感覚の鋭い実業家でもあ

つた。五十余年も前、このランゲーンの病院に眼をつけると、弟子の女医二人を、はるばる派遣したのである。

この後任にと、起佐女に白羽の矢が立った。夫の木村は、狭い島国日本にあきたらず、冒険心に富んだ男だつた。

「ビルマとは面白そうじゃないか。思いきつて行ってみよう。僕は製米所をやるから、お前は力いっばい女医として、働いてごらんよ」

と言つた。

起佐は、なんの怖れも、ためらいもなく、ひたすら新しい目的に向つて、神戸港から七千トンの船に乗ると、ビルマのランゲーンに旅立つたのである。

暑い盛りの二十日あまりの船旅は、きも姿の起佐にとって、かなりの難業であつたが、希望に燃えてはずんだ若さには、あまりこたえなかつた。心はただまだ見ぬ土地、

ビルマへ……ビルマへ……

とひたすら向つていた。

味噌汁のような水をたたえてゆるやかに流れるイラワディ河の入口、ランゲーンの棧橋についた時の、身のひきしまる感激は、六十年たつた今も、忘れられない。

ついた病院には、五十人近くの人々が働いていた。ターバンをまいて、白シャツに絹のロンギーをまとつたビルマ人は、音楽好きで濃厚な民族だつた。仕事としては、肉休労働よりも、室内の事務系を好み、いつも微笑をたやさず



働いていた。カレンの婦人は、教育程度いく分高く、看護婦の仕事

「おれにも、たっぷり頼むよ」とポットから、なみなみついて

「サンキュー……」と、建物のかけや、庭の菩提樹

この差別は、なにか不自然な感じをいだいたが、永い習慣はその

「セヤマ。セヤマ。いけませんよ。セヤマが、そんなことをして

と、いそいで箸をとりあげられるのが常だった。

「おお暑い。暑い。シャワー浴びようかいな」と診察の間をみつけると、浴室にとびこみ、思いきり水をあび

と診察の間をみつけると、浴室にとびこみ、思いきり水をあびては涼をとった。

図書紹介

東南アジア研究叢書六  
ビルマ (地誌・歴史・経済)

野上裕生 訳  
発行所 株式会社  
創文社  
定価 二五〇〇円

過日、京大の東南アジア研究センターに、市村所長をお訪ねした時、一読を慫慂されたのが此の本である。

なき愛情を込めて出版されたものであり、その上訳文は翻訳物特有の堅苦しさやぎこちなさがなく、実に読みやすく、高校生向けの地歴書を読むような感じがする。

邦国の軍医大尉

桑島治三 著  
定価 二千元  
日本医事新報社編

角我々の心の琴線に触れる心温まるお話ばかりです。お読みなれば成程と分ります。

御購読希望の方は当協会本部まで御申し込み下さい。割引、金巻

留学研修生コーナー

タ・ワ・グツ

入口が一つあるパコダー  
京都大学ウィルス研究所  
研修生ウ・テツ・ウイン

去る五月十九日、大阪で開催さ

れた、ビルマの新留学研修生の歓迎会に出席された、各位は、大阪

そのパコダ群の一つに「タ・ワ・グツ」と呼ばれる有名なパコダがありましたが、そのパコダには、我々ビルマ人にとっては実に悲しい、胸中に留めておくべき物語があり、我々ビルマ人が決して忘れる事の出来ない、若きカッパルの愛情と勇気に関するお話があるのです。

昔、パガンに一人の王様が住んで居りましたが、彼には目に入れても痛くない程、可愛いがついていた美しい、チャーミングな一人娘がありました。彼女はとても綺麗でしたので、近在の王様や王子から是非ともお姫にいたいただきたいという申し込みがありました。その王様は娘を愛する余り、いつも申し込みごとわり、彼女を自分の目の届く所に居いておき、彼女には好きな事をさせておく、代りに、彼女が、結婚するとか、男を愛するといった事には強く反対してきました。

「ハーブ」を奏でたり、聞いたたりする事で、夜毎、侍女と一緒に近くのパコダへ行き、煌々と照り輝く月光の下で、ハーブを奏でておりました。

ある夜、いつもの如く、彼女はパコダの辺りに行き、ハーブを奏でようとしたが、ハーブを奏でようとしたら、どうも、妙なる、時、何処からともなく、妙なる、幻想的なハーブの音が聞えてきました。彼女は、しばらくの間、その調べに耳を傾けて、鑑賞していましたが、余りにも美しい調べでしたので、とうとう意を決して、その演奏者を探し出そうとしました。侍女は、王様の命令を思い出し、止めようとしたが、きかずに、遂に件の演奏者を探し出しました。

その演奏者は、とてもハンサムな青年で、月に向いながら、やさしくハーブを奏でつつ静かに歌っていました。彼女はそと彼の後に行き、しばらくの間、妙なる音楽に身も心も浸していましたが、やがて彼に話しかけて彼の名前を尋ねました。彼の名前は「ワ・ナ」だと判り、幾度も「ワ・ナ、ワ・ナ」とつぶやきながら、別れを告げ、素早く彼の下から姿を消したのです。



付かってしまいました。王様は自分の娘が、何処にも居る平凡な青年、「ワ・ナ」と深く愛し合うようになった事を知って、大變立腹し、二人を捕えてしまいました。もしも、彼が王子であるとか金持の息子であつたら、恐らく二人の愛を許したでしょうが。

早速、王様は娘に彼の事を諦めるよう説得にかかりましたが、娘はそんな事なれば、自分は死んでしまふと言ひ張りました。そして二人はお互いに、地上の如何なる者も、二人が死ぬ日までは、二人の愛情を引き裂く事が出来ないと言ひ合いました。

王様はすっかり怒ってしまひ、部下に、いつも二人が逢つていたパゴダの入口を開けさせ、二人をその中に閉じ居る様に命じました。二人は怒っている王様にお別れの挨拶をして、手に手をとりながら雄々しく洞穴の中へ入つて行きました。勿論、ワ・ナの左手にはハープがしっかりと握りしめられていました。王様は部下に戸口を閉め、セメントで密閉する様に命じました。二人が間もなく飢え死した事は当然ですが、二人を引き裂く事は出来ませんでした。

此の出来事が起つてから、人々は件のパゴダを「タ・ワ・ゲツ」——入口が一つあるパゴダと名付けました。

さて、此のお話は事実であるかどうかは分かりませんが、何れにしても、恋人同志にとつては、うら悲しいが勇気に満ちた物語りです。而も、「愛」と「献身」は此

の世で最も力強いものであり、そして、如何なる人でも「真実の愛」は決して引裂いたり、破壊させたりする事は出来ない事を示しています。

此の物語りは今でも、ビルマ人にとつては忘れられないものであり、現在ビルマでは、有名な歌になつて残っています。どうぞ「タ・ワ・ゲツ」パゴダを御覧になるのを忘れにならない様お願い致します。今でも、二人が奏でるハープの調べが、そこはかとなく聞えてきそうです。

私は日本の方々、此の物語りをお読みになつてから、パゴダを見られたならば、我々ビルマ人と同じ感慨に耽けられると信じています。

帰緬のたより

帰国留学生

ド、テイ、テイ、アウン

たいへんお世話になりました。29日のお帰りの日、せん月の50分にビルマにぶじに着きました。日本にいたあいだ、じぶんのむすめのようにしんせつにやつて下さつたことを、いつまでもおぼれませぬ。ありがたうございませぬ。ついた日にニヤントンさんは、しごとがながさうして、きゆうかをとれなかつたから、ひこようじようへむかえにこれなかつたです。ひこようじようへ、ははとおとうと、いもうと、ニヤントン

さんのおとうさんがむかえにきました。2月の17日のしやよこんでたさまで、みんなよろこんでいます。ははとおとうさんは、しやしんをなんども見てよろこんでいます。日本ごでてがみがかけないので私がてがみをかけば、ありがとうとかくようになっています。こうちゃんもいよまうへいます。みなさんによろしくおつたえごを下さい。私は4月の1日からしごとをつずけていますが、ちよつといそがしいです。ふねはこん月の19日につきましたが、にもつを20日からわたしました。日本大使館へももつていきました。にわさんともよろしくおつたえなさんにもよろしくおつたえなさん。私たちのけつこんのこによつては6月の30日に INYA LAKE HOTEL にすることにきまりました。招待状ができればおくりますが、もしできればしゆせきして下さい。たのしみになっていきます。おげんきでいるようにのつていきます。チ・チより

ウ・チヨウ・タン帰国  
コロボンポランに依り昨秋来日、阪大病院にて、専門のレントゲン技術を研鑽中のウ・チヨウ・タン(ラングーン総合病院レントゲン科副技師長)は、此の程研修を終了、六月十八日に帰国します。

同君の離日に先立ち、十四日、同君と特に昵懇であつた会員数名が、大阪の鈴屋にて、送別のささ

やかなパーティーを開催しました。席上同君は在日中の協会員諸氏の物心画面上に亘る御温情、御厚志に対し、深甚の謝意を述べると共に、帰国後は、文化協会のビルマ支部設立に微力を尽す旨、繰り返し述べました。

尚お同君のビルマに於ける連絡先は左記の通りです。(保科記)  
OFFICE : DEPARTMENT OF RADIOLOGY  
RANGOON GENERAL HOSPITAL RANGOON, BURMA.  
TEL : 11722 EXT. 27 or 47.  
HOME : No. 10, SERGEANT QUARTER RANGOON GENERAL HOSPITAL COMPOUND, RANGOON.

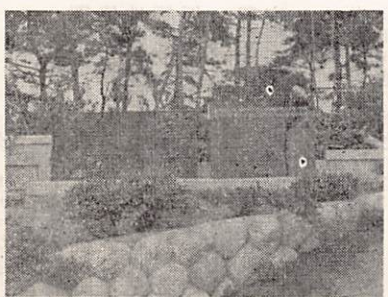
支部便り

東海支部

「ビルマゆかりの碑」建設される

浜松市館山寺大草山に

浜松はビルマに深いえにしをもつところである。ビルマ名ボ・モウ・ジョーとしてビルマ独立の育ての親とされた、故鈴木敬司元少将の居住されたところであり、ビルマ独立の志士オン・サン將軍ほかネ・ウイン大統領などの人々がこの地に亡命、独立運動の画策をした家も当時のまま残されている。この「ビルマゆかりの碑」は日緬戦友会が主体となり、日本・ビルマの深い絆とビルマに於ける



の鎮めが吹奏されつつ入魂の礼拝が行われた。碑石は長方形の黒御影石で飯田祥二郎氏の長文が刻

戦歿者を慰霊するため、昭和四十六年発議され、ご苦労の末漸く今日(昭和四十九年五月十二日)完成、ここに除幕式が行われたのである。建設場所は景勝の地浜名湖畔大草山、眼下に湖を見下す松林の中である。当協会東海支部として、小菅会長代行他数名、留学研修生四名、本部より酒井、智学、森の三氏参列、なお支部の肝いりで名古屋テレビ報道部長丹羽氏の好意をえて十六ミリが撮影された。前日の雨天も今日は湖岸の空は五月晴れの好天となり、浜松航空自衛隊南基地の軍楽隊吹奏裡に式ははじめられ、両国旗掲揚、故鈴木敬司氏の孫娘さんにより、テープが切られ、招待席の駐日ビルマ大使ご夫妻はじめ、竹山静岡県知事、平山浜松市長、桜井徳太郎氏ら関係者多数の見守る中に、「国



まれ、仙台石の添石にはウ・チ  
イ・ココ大使のビルマ語で書  
かれた「日本ビルマ仲よく平和に  
しあわせに」のタイトルの下に竹  
山静岡県知事の鎮魂のことばが刻  
まれている。各方面の式辞、献  
花、献吟など滞りなくすみ、こ  
に日緬友好のシンボルは浜名湖畔  
にその影を映し美しく輝きそめ  
た。

ちなみに名古屋テレビ製作の十  
六ミリは、やがて大使館を通じビ  
ルマ国へ寄贈することになる予定  
である。(吉岡記)

関東支部

一・四 東京ビルマ大使館にて、  
ビルマ独立記念日レセプション  
開催される。本会よりの出席者  
次の通り。

小菅、酒井、塔本、山田(元)、  
山下、竹石、山口、樋谷、猪  
股、山里、栗原。  
一・五 ビルマ大使館にて、ビル  
マ映画会。坂田、山口、栗原出  
席。

二・一〇 NHKビルマ向放送ア  
ナウンサー・ウ・ニイ・ニイの  
交替要員ウ・チョウ・ウー・来日  
歓迎会開催(於、港区浜松町  
加納ビル)出席者次の通り。  
田辺、山口、坂田、川口、中津  
瀬、栗田、猪股、栗原。

三・二 本年度帰国留学(研修生  
(ウ・ティン・トウ、ウ・パ  
イ、ウ・ソウ・ブレ・ソウ)送  
別会開催(於、芝公園、郵便貯  
金会館)出席者次の通り。

ウ・ティン・アウン、ウ・ト  
ン・シウエ、ウ・セイン・ルイ  
ン、ウ・ソウ・ミン、ウ・チ  
ウ・ホウ、ウ・チョウ・ウー、  
ウ・ティン・マウン、ウ・ケイ  
ン・ソウ・ウイン、ウ・ケイ  
ン・マウン・ジイ。本会側、山  
口、宮内、中津瀬、土屋、菊  
池、江口、太田、近藤、牧野、  
鈴木(雲芝)、木村、高信、山  
里、田辺、栗原。

三・五 ビルマ展開催につきビル  
マ大使館の後援を得るためウ  
・ココ大使閣下と懇談、全  
面的協賛を確約される(坂田、  
栗原)。

三・六 ビルマ展開催につきビル  
マ貿易事務所の後援を得るため  
ウ・チュ・カイン所長と面談、  
協賛を得る。(栗原、坂田)

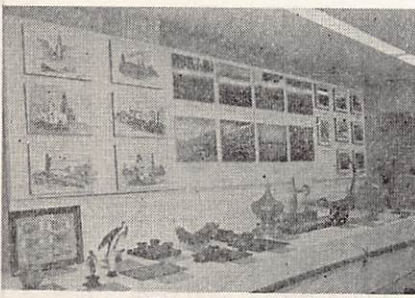
三・二七 ビルマ大使館ウ・ラ  
・チ文教担当官帰国のためウ・テ  
イン・ウー交替担当官と共に歓  
送迎会開催(於、加納ビル)出席  
者次の通り。ウ・タウン・セイ  
ン、ミスター・ザム、ウ・テイ  
ン・ルイン(以上武官宅)山口、  
猪股、土屋、栗原。

四・五 来日ビルマ研修生、ウ  
・チョウ・デイン、ウ・ケイン  
・マウン・イン、ウ・ボ・タ、  
ウ・アウン・タン、ド・ケイ  
ン・マー・マー、ド・テイ・テ  
イ、ウ・トン・チイを羽田に出  
迎える(栗原)。  
四・七 在京会員、家族と在留ビ  
ルマ人、家族との合同お花見、  
ピクニックを満開の上野公園に  
て開催。出席次の通り。

ド・チュエ・チュエ(大使館)  
及家族計六名、ウ・ケイン・マ  
ウン・イー(貿易事務所)及家  
族計五名、ウ・チョウ・ウー  
(NHKアナウンサー)及家族  
計五名、ウ・ティン・マウン・  
マウン(I・A・T・A)及家族計  
四名、ウ・アウン・ケイン、  
ウ・セイン・ルイン、ウ・セイ  
ン・ラ・ボ(以上留学生)ウ  
・チョウ・ホウ、ウ・トン・チイ  
(以上研修生)合計二五名、支  
部側、宮内夫妻、譜久村夫妻、  
近藤夫妻、栗原夫妻、山口、太  
田、田口、田辺(N・H・K)計  
一三名、総計三七名。

四・二〇 協会社団法人資格取得  
に関して外務省南東アジア第二  
課藤田課長と面談(梅原、坂  
田、栗原)。

四・三〇 新任駐ビルマ日本大使  
館付防衛官(武官)宮沢次郎  
氏の出発を羽田に見送る(栗  
原)。



展示物

原。

五・一八 前任駐ビルマ日本大使  
館付防衛官寄村武敏氏の帰国を  
羽田に迎える(栗原)。ビルマ  
展出品のビルマ児童絵画、ビル  
マ切手多数をもつてきていただ  
き受領する。

五・二二 在京東南アジア各国大  
使夫人で構成する、アジア婦人  
友好会主催の民俗音楽舞踊会に  
ウ・チ・ココ大使閣下夫人よ  
り協会の出席勧奨される(於  
東京丸の内、商工会議所ホー  
ル)。出席者次の通り。猪股、  
山口(夫人)、菅野、太田、小  
泉、山田(元)、山里、栗原。

五・二五〜二七 群馬県館林市に  
於て、同市「ビルマ展実行委員  
会」(委員長広沢純孝氏)の協  
力を得て「ビルマ展」を開催す  
る。(関東支部事務局長  
栗原栄一記)

ビルマ展開催

期日 昭和四九年五月二五日  
(土)〜二七日(月)

開催地 群馬県館林市、足利銀  
行館林支店

展示品 約三〇〇点(美術品、  
工芸品、民芸品、物産  
見本、装飾品、民俗衣  
裳、家庭用品、食料

貨、写真、地図、出版  
物、ビルマ児童絵画、  
ビルマ諸語訳物、遺骨  
収集計画図等)

行事 ビルマ音楽、ビルマ舞  
踊(マ・ティン・イ

一・ミヤ)留学生懇談  
会、記録映画(慰霊巡  
拝、即売会)シャンバ  
ッ、ビルマ切手、図  
書、民芸品、絵画等)

ウ・チ・ココビルマ大使閣下  
御夫妻、二五日(土)午後一時、  
協会本部、関東支部役員並に、現  
地実行委員会委員及先着ビルマ  
等多数出迎へのうち会場到着、  
坂田関東支部長の案内にて会場  
一巡、いづれにもなつかしげに  
ご覧になった後、記念撮影され、別  
室にて休憩される。

以上在先立ち、三階ホールにて  
はビルマ巡拝映画の上映、ビルマ  
少女に依るビルマ舞踊等がスケジ  
ュール通り催された。  
二六日(日)は留学、研究生五  
名も到着、現地青年達との懇親会  
も行われた。又、この日の午後は  
館林市内茂林寺に於て航空ビルマ  
会の慰霊祭が行われるので、午前  
中はそれに出席する戦友多数が来  
場した。

会期は二十七日(月)までで、  
地元館林市は勿論近在の都市から  
も多数の参観者が来場し、参観署  
名書だけでなく二名を越へ、署名  
しなかった家族等を合計すると総  
数は三千名を越えているものと思  
われる。

(二十五日夕は地元主催に依る  
記念レセプションが催され、大使  
閣下御夫妻以下ウ・チ・カイン貿  
易事務所長及家族二名、ウ・ケイ  
ン・マウン・イー及家族三名。  
ウ・ティン・マウン・マウン及家  
族三名、ウ・チョウ・ウー及家族





会場内、ビルマ大使(中央)右側は大使夫人  
左側は栗原理事

四名、計一八名のビルマ人及協会本、支部役員多数館林に一泊する。大使閣下御夫妻は美智子妃殿下のお育ちになった正田邸に一泊された。

(事務局長 栗原栄一)

今回のビルマ展の計画は、数ヶ月前より館林市在住の関東支部副支部長鈴木崇之氏(航空ビルマ会名誉会長)が慰霊祭を機に当地でビルマ展をやつてはと云うことを館林ロータリークラブその他の団体の有志に話したところ、この話がまとまり、早速「ビルマ会実行委員会」を結成、同時に協会関東支部では「ビルマ展準備委員会」を発足、諸準備にかかる一方、坂田支部長、栗原事務局長は数次に

亘り現地館林に赴き種々打合せの結果「ビルマ展」開催の運びとなったもので、準備委員会は展示品の収集、作製、又現地では会場設営、PR等に夫々工夫、努力を結集した結果、同展を成功裡に終了できたもので、関係者、特に「館林ビルマ展実行委員会」委員長広沢純孝氏、事務局長加藤尹齋氏並に発案者鈴木崇之氏等には深甚なる謝意を表するものである。

(関東支部 支部長 坂田泰)

駐日ビルマ大使消息

駐日ビルマ大使ウ・チッ・チッ・コウは六月廿日より八月二十九日まで、ベネズエラ的首都カラカスで開かれる国連第三回海洋法会議に出席のため、十四日同地へ出発された。帰日は九月上旬の予定。(保科記)

泰緬国境で

日本人部落発見

バンコック・ポスト紙は、四月八日特別インタビュー記事を発表、タイ西北部に日本兵百二十名が住んでいることを伝えている。同紙の記者が、現地に入つてインタビューした記事によれば、その大要は次のようなものである。

この日本兵村落はタイ西北のチェンマイから西に入ったマエ・ポーン・ソーン省のバイ県にあり、山ひとつ向うはビルマ領という山間にある。同地はビルマ側に入るとサルウィン河でビルマ本土と交通が杜絶、タイ側は交通の便が悪いこ

とど、タイが圧倒的に少ない少数民族地帯であるため、これまで全く外界に発見されなかったもの。この日本人たちは、インパール作戦に従軍した日本兵たちで、退却戦で生き残つたものわずか五分の一と言ふ。同作戦で、ラungkaiに撤退せず、退路を絶たれて山のなかにとじこもつた元日本兵である。

数方の遺骨も眠る

現在、同地の少数民族・カレン族の女性を妻とし、定住生活をしており、その生活は極めて規律正しいものであることを同インタビューは伝えている。部落付近には旧日本軍のトラックや火炮がサビついたままおかれてあつたとしており、日本に帰国する意志はないという言葉を伝えている。

同地区一帯は、これら日本兵が身をかくすには極めて有利な山岳地帯で、これより北には、国民政府軍第九一、九三師団がガンバツており、そのさらに北には、中共軍四個師団がビルマ反政府軍を支援している。それは、中共、ビルマ、ラオス、タイの四国境隣接地帯である。

日本で小野田元少尉の帰国がさわがれたため、タイでは「そのようなものはこちらにも」と言うわけで、新聞記者を派遣し、インタビューを行かせたものらしく、かなり正確なインタビューを載せている。ビルマ、タイ西北部隣接地帯は、これまで一度も遺骨収集団が入つたことのない所で、数方の元日本兵の遺骨がそのまま朽ち

ている、と言われる。現地は山岳地帯

これら日本兵たちは、他の現地人に較べ知的レベルが高く、農耕法、建築、水害工事、医療などで現地人の尊敬を受けていると言われ、付近の現住民は病気の場合、ここで治療を受けている。

また、同地はタイ・ビルマにかかると、同地の居住地であり、勇猛を持つてなるカレン族からも尊敬を受けている。しかし、すでに日本兵は五〇歳以上になつており、カレン族との間に生れた子供たちの世代に変わりつつあるが、日本語はあまりできないと言ふ。

だが、父が日本人であることを誇りにしているようであつたと言ふ。すでに、軍隊的規律はなくなつてはいるが、部落の雰囲気は他の山地民族のものに違つてはいると言われる。同地は海拔千メートル以上のタイ北部であるため、四季の変化もあり、比較的快適な所らしく、主食はやはり米であつたと伝えている。(勝共新聞)

ウ・ミヤ・エイ六位に入賞

ウイザード、トーナメント

五月二日・三日の両日、和歌山県の橋本カントリークラブ(七・二〇ヤード、パー七二)で開催された、ウイザード・トーナメントにビルマ国唯一人のプロゴルファー、ウ・ミヤ・エイが参加しました。

此のコースは、ウイザード(魔法使い)の名に相応しく、屈指の難コースで、池越えあり、ドッグ

レッグあり、起伏のはげしいアップダウンありで、全く目まぐるしく、出場選手一同スコアーを纏めるのに大変苦勞しました。

併し、ウ・ミヤ・エイは日台蒙の一流プロに交つて善戦健闘、一日目はパー七二で断然トップに立ちました。二日目は馴れない寒気に悩まされてコンディションを崩し(本人の曰く)惜しくも四オパーの七六をたたき、結局六位に入賞、賞金六十五万円を獲得しました。

彼今後の活躍を期待します。(保科記)

灯油不足?のもたらした惨事

列車内で十九人焼死  
昨年の十二月二十三日の深夜、マンダレー発ラングーン夜行列車が進行中、突然客車一両が燃え出し、子供を含む十九人が焼死、五十一人が大怪我をするという大惨事が起りました。

当局の調査に依ると、客車の照明に使用されていたロウソクが倒れ(電球は時々盗まれるとの事)、それが乗客が秘かに持ち込んでいた灯油かんに引火、燃えひろがつて、大惨事になった事が判明しました。

此の灯油は、石油不足のため、乗客の一人がこっそりとラングーンへ運ばうとしたものなどの事です。(保科記)

生活改善と経済安定を

要望のスト続発

外電は六月六日ラングーン附近



の織維工場や造船所で、デモ隊の抵抗を排除する政府軍の発砲により九十五人が死傷したと報じている。又ラングーンの地点で鉄道のストが統発しているため、現在ラングーン周辺は交通麻痺の状態にある。更に此の現象は同国の北部地区より逐次南下して拡大してきたものであると報じている。

そこで重視される事は、ビルマは去る三月二日に新憲法を制定し、ビルマ連邦社会主義共和国と国名を改称すると共に、革命政府から名実ともに人民政府に国政を移行した許りであるという事である。そして独自の中立的社会主義政策を遂行するため、海底油田を始め、農業、漁業の開発を積極的に推進する姿勢を強めていた。

これはビルマが一九四二年に独立した当時の経済組織を改正するため、社会主義機構と鎖国的政策を多年にわたり実施したが、その結果は予想外に経済的水準が低下した。そこで再び門戸開放政策に転じ経済の再建策に努力し始めていた。

併しながら、経済的情勢の悪化はインフレと失業者を増加させるのみで、政府の抜本的開放政策が浸透するまでに至っていないが、様子で、遂に首都ラングーンの周辺まで不穏な情勢が発生したわけである。

又、ビルマの情勢に精通している情報筋に依ると、この度のラングーン周辺の暴動は、ネ・ウイン政権に対する直接の反政府活動とはみられないが、農民や労働者の

生活水準が向上しない状況が余りも長く続きすぎた。更に毎年不穏な情勢が発生する時期は米が少なくなつた時で、今回の様に米の収穫時直後に発生した事は異例であるとされている。

従つて、新内閣が誕生し、新議院が発足しても、大学は卒業しても就職出来ない情勢下で、インフレに悩む農民が米の供出を減らすという現象が、イライラムードを助長させて、合法的手段のストに発生したもので、一時的現象であるといふのだとの見方もあるが、その底流には国民が生活の向上の経済の安定に、強い期待を有つて居る事が窺われる。

更に、最近のビルマ国内のスト続発に関連して、シャン州に屯しているビルマ共産軍や、旧ウ・ヌー系独立軍が、此の機会に直接陽動作戦を展開する動向は無い権と威筋は判断している。  
(グラフィック エイシヤより)

アラカン沖の油田開発

石油開発公団とアラカン石油開発会社は六月十日、ビルマでの石油開発のため同国と海洋鉱区の開発契約を結んだと発表は、パングラデッシュとの国境に近いアラカン沖の三ブロック、計二万平方キロメートル。

ビルマ政府は従来、石油開発へ外資の進出を認めていなかった

が、最近、海洋鉱区は外資に開放する政策に変えたため、我が国も石油開発公団が窓口になってビルマ側と交渉していた。  
契約内容は、日本側が探鉱から生産まで一括請負い、資金と技術をすべて提供する見返りに、成功した場合生産量の半分を引き取るというもの。此の鉱区は付近の島で低硫黄の良質油が見付つてゐる。(読売より)

日本人漁業指導者に「実刑」の情報に就て

六月十三日付日本の各紙は、漁業指導の六人の邦人が領海侵犯の疑いで、シンガポール人二十人、タイ人三人、フィリピン人二人と共にビルマ海軍に逮捕され、全員実刑の判決を受け拘留されていた事が外務省筋の情報で判明した事を報じていますが、目下の所詳細なる情報がありませんので、判明次第、次回会報にてお知らせします。(保科記)

ビルマの娘さんが

ペンパルを探しています  
ラングーン日本語学校で勉強している、左記の方々を日本のペンパルになってくれる人を探しています。文章は日本語で結構ですが、差出人は必ず「日緬文化協会」である事を明記して下さい。(関東支部栗原記)  
OMA THEIN KYI  
OPERATION DEPT. B.A.C.  
MINGALADON.

RANGOON, BURMA.  
OMA WAI WAI DHN  
No. 509, LOWER  
PAZUNDAUNG RD.,  
EAST RANGOON,  
RANGOON, BURMA.  
OMA MYAT AYE CHANN,  
No. 248, AHLONE  
RD., DAGON PO.,  
RANGOON, BURMA.

会員情報

ビルマ料理店

香辛料がピリッと利いた懐かしい「ビルマヘン」を喰べながら、ビルマ談義に花を咲かすことの出来る「タミンザイン」があります。  
阪急電鉄神戸線の西宮北口駅前を約二十米前進した所の左側にある「瀟洒な店「サガイン」で、当協会の理事、長谷川元信氏が、ビルマの風土と人間性に惚れこみ、協会のPRも兼ねて今年の一月にオープンされたものです。  
お店は小さいですが、ショウケースや壁にはビルマの民芸品が所狭しと飾られ、カシワのフライにライス付き、それにガビーやマンガの漬物、トマトの味を利かせたコーンスープ等が用意されています。

当方面へお越しの折りは是非お立ち寄りの程を。(保科記)

恩人を是非日本へ

姫路市在住の田中一郎氏(公員)は終戦後メイミョウのキャンプに

収容され、労役の明けくれを送つて貰いましたが、この時同氏に何かと援助の手を差し伸べ息子の様に可愛いがつてくれた婦人、ドウ、マッケン・イーの温情が忘れられず、去る四十七年十一月には単身ビルマへ渡り、遂に廿三年振り、「ビルマの母」と再会、お互いに感激に涙が流れたのです。

又、西宮市在住の植田正六氏(協会理事)も同キャンプに収容されていましたが、当時、通訳をしていた同女の娘ドウ・キン・イーと知り合い、帰国後も文通を続け、お互いに親睦を交してきました。

田中氏は「あの時の恩返しには是非とも「ビルマの母」を日本へ招待したい」と日頃願っていました。海外旅行は無理なので、母親代りに娘のドウ・キン・イーを招待する事にしました。

同女は現在、四十八才、タウンジー大学の助教授で日本語と日本史を教えてをり、在日留学生の中にも彼女の教え子が数名をります。

二人は早速、招待状を送りましたが、渡日は客観状勢からみて困難と分り、続いて駐日ビルマ大使館へ援助を申し込みました。併し「若者を一人でも多く海外へ留学させる方針なので許可はとも無理……」と拒否されました。

思い余つた二人は、ビルマ国文部省へ直訴状を出し、一日千秋の想いで渡航許可の下りるのを待つています。(神戸新聞)